

メビウス研究会（第168回）

日時：2011年7月2日（土）、14:00～17:15

場所：京都外国語大学

教室：143教室（1号館4階）

キャンパスマップ：<http://www.kufs.ac.jp/aboutkufs/campus/map/index.html>

交通アクセス：<http://www.kufs.ac.jp/aboutkufs/campus/access/index.html>

問い合わせ先：英米語学科 渋谷研究室

メールアドレス：y_shibuya@kufs.ac.jp

プログラム：

第一発表：14:00～15:30（発表時間：60分、質疑応答：30分）

タイトル：動詞devoirの本質的機能

発表者：岸本 聖子

所属：大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

要旨：フランス語の動詞devoirには一般的に2つの形式が認められている。一つは« devoir A à B »の形式で本動詞としての用法である。もう一方は« devoir + inf. »の形式でモダリティを示す用法である。本研究では、領域やイベント・スキーマ等のアプローチを用いてこのようなdevoirの本質的な機能を探ることを目的とし、その意味拡張（多義性）の動機付けについて考察したい。

第二発表：15:45～17:15（発表時間：60分、質疑応答：30分）

タイトル：定型からみる意味構築のプロセス—慣用句・ことわざとその周辺を考える—

発表者：土屋 智行

所属：杏林大学（非）

要旨：言語には、慣用句やことわざなど、ひとつのまとまりとして記憶・発話される表現が存在する。人はそのような「型」として定着している表現、すなわち定型表現の意味をどのように理解しているのか。ここでは、辞書に記載されている定型表現の分析によって、その形式的・意味的なネットワークを示す。また、定型表現からの逸脱（パロディなど）を見ることで、これまで議論されてきた「意味的な分析性」を再考する。